

# 片岡文雄「山鬼」論

——「地方性」の追求——

永橋 禎子

はじめに

高知県の近代詩を見渡すと、岸本村（現・香美市）に生まれ、ほとんど高知を離れることなく小学校の教師として一生を終えた岡本弥太と、宿毛町（現・宿毛市）の出身でプロレタリア詩の運動に参加し、その退潮期には「四万十川」などの抒情詩を書いた大江満雄を双璧とし、さまざまな詩人が存在する<sup>(1)</sup>。百田宗治と室生犀星に師事し、伊藤整や三好達治などの詩友に恵まれた乾直恵、プロレタリア詩人のなかでも高い評価を受ける榎村浩、芥川賞を受賞した清岡卓行、ロマン・ロランと交流を持った片山敏彦や上田秋夫、弥太との友情のなかで成長した川島豊敏や島崎曙海、純戦後詩派に位置づけられる嶋岡晨などである。

大江や片山、清岡、嶋岡など、高知を離れ幅広い活躍をした人間もいるが、一方で弥太をはじめ、ほとんど高知から離れることなく詩を書き続けた人々も多い。嶋岡の後輩である片岡文雄もまた、高知にとどまって詩を書き続けた人間である。「遠流の日々のなかで」（一九八五年）で、片岡は伊東静雄の「わがひとに与ふる哀歌」中の「帰郷者」冒頭二行「自然は限りなく美しく永久に住民は／貧窮してあ

た」<sup>(注)</sup>／は改行を意味する、以下同様）を引用し、こう述べている。

伊東と私とに共通する認識は、地方には可能性を含む未来が見えてこないということである。しかしその認識のあとの決断と行爲においては、左右に分かれてしまうのだ。伊東は都会を決然と選んだのではないにしろ、都会へと逃げたのだった。私は貧窮とそれゆえに不平にまぶされたふるさとでのくらしを、一種異郷にある想いで日々耐えながらも、ここにうづくまることを決意して久しい。つまりは近代から見捨てられ、落ちこぼれてはい上がれない人々の内部を、自らの詩作にすくいとり、とを、同時代の一翼を担う表現の営みとしてえらんでいるわけである<sup>(2)</sup>。

タイトルの「遠流」という言葉は、土佐が土御門上皇や尊良親王をはじめとし、政治的敗北者の流れる場所であったことからきている。それはこの地の文化を開く端緒ともなったが、南国土佐の明るいイメージとは裏腹に、暗く深い思いをも歴史に刻んできた。

片岡は、後述するように一度は夢を抱いて東京に出たものの、実家の窮乏に引き戻されるように故郷に戻った人間である。その後は常に高知で詩を書くことを意識し活動を続けた。

片岡の詩の中でも評価が高い方言詩「山鬼」は、最初に所収された第四詩集『地の表情』（一九六六年）から晩年に至るまで、片岡の詩活動に現れた作品である。本稿は、この「山鬼」を手掛かりとして、片岡が高知にあつてどのような問題意識を抱えて詩作を続けたのかを論じた。片岡の活動から、地方の文学のありようの一端を考察できればと思う。

### 一 片岡文雄の略歴と詩史での位置づけ

ここに片岡の略歴を記す。<sup>3)</sup>

片岡は、一九三三年九月一二日、仁淀川のとりにある吾川郡伊野町（現・いの町）に生まれた。七歳の時に高知市旭に移り、その後高知県立高知工業学校に入学、ここで一年先輩であった嶋岡辰と知り合う。卒業後は市役所の臨時職員として働くが、やがて嶋岡の背中を追い、一九五三年、一九歳の時に上京。昼間は東京都区画整理事務所にて臨時職として勤め、夜間に明治大学文学部に通った。生活苦で死にかけたこともあるという。嶋岡に勧められて同人詩誌「獺」に詩を書き、「詩学」にも投稿を開始、次第に人々に認められるようになり、一九五七年、「詩学」二月号にて新鋭詩人の推選を受ける。

しかしその年、明治大学を卒業した片岡は、嶋岡に「突然ですが、明日の夜行で帰ります。」と書いた一通の絵はがきを残し、家計を一人で支えていた高知の母の元に戻った。その後は県立高校で教鞭をとるかたわら、「詩学」「地球」などに作品を発表。詩集を次々と

出版し、第五詩集『悪霊』が第三回椋庵文学賞、第八詩集『帰郷手帖』が第九回小熊秀雄賞・第二一回高知県出版文化賞、第一五詩集『漂う岸』が第一三回地球賞、第一七詩集『流れる家』が第一六回現代詩人賞を受賞するなど高く評価され、一九九四年で定年退職した後も、日本現代詩人会、日本文芸家協会各会員、日本現代詩歌文学館評議員などを務めた。後進の育成にも厳しく熱心で、子息の話では、全国から詩の指導を求める人々からの手紙がひっきりなしに届き、それらに律義に返事をしていったという。

二〇一四年一月九日、心不全のため死去。享年八二歳。

片岡はほとんどを高知で過ごしているが、たびたび自身の歩みを詩史のなかで位置づけ、問題意識を明確にしてきた。したがって、片岡の詩の活動は、当時の詩壇の状況と深いかわりをもつと考えられる。その活動がどう位置づけられるのか、これまでの詩人評も踏まえながら、以下に整理したい。

始まりは、嶋岡辰らによって発刊され、のちに片岡も加わった詩誌「獺」（一九五三年刊行）である。「獺」には、「ヒューマニズムは人間を擁護すること、その苦悩や絶望を身もだえて訴えることであるよりも、むしろ喪失した人間存在を回復すること、人間を真の故郷につれ戻すことであるといえる。」<sup>3)</sup>とある。

粟津則雄は、「昭和詩史」で「獺」の活動を純戦後派として位置づけており、純戦後派については飯島耕一を評した岩田宏の文章を引用してこう説明している。「戦争の大義名分に絶望的に陶酔するには若すぎ、戦争の現実を見逃してしまうには年取りすぎていた当時の中学生たちは、非戦闘員にのみ許された茫漠たる自由のなかで、

ギラギラと思春期のまなざしを研ぎすましていた。(略)かれらは決して戦争に馴れなかつたし、八月十五日以後も、だれよりも平和になじめなかつた。その筈である。かれらは初めから平和を知らなかつた。そして戦争を体験しなかつた若い詩人たちにとつての戦争や戦後を「それは、いつてみれば、両親を知らぬ浮浪児が、その本能的感覚を総動員して、おのれの出生の秘密を探りあてようとする志向である。かれは自分が物心つく直前の過去を知らなければならぬ。」と説明している。

「出生の秘密を探りあてようとする志向」は、たしかに片岡の詩に見られるものである。その詩が父や母、そして父祖とその地のことをよく取り上げているのは、多くの人の指摘するところであり、父や母、祖先を生みなおすという彼の特異なモチーフは、「手の話」「産褥幻想」「肖像」などの作品に見ることができる。

片岡自身もまた、「戦後詩という呪縛」(一九九三年)のなかで、自らの世代を「宙ぶらりんの心を抱く少年」とし、戦争を体験した世代と自分の世代を比較して「前者における自己再建と時代に相わたる想像行為と、後者の自己形成と想像行為が一致することも当然ない」と述べている。

高知に戻った後の足取りについては、片岡は詩集『薄明』(一九七一年)でこう述べている。

一番の内省的で求心的な方位へ詩をいざなう、いつてみれば形而上詩への関心の側に書かれたものらは、『帰巢』(注、第一詩集)中へ当然組み込んでやらねばならない。(略)第二詩集『夜の馬』は、第一詩集を世に問うた者が必ずといっていいほどぶ

つかる、前集とは異なる世界への脱皮という気負いの下で、あれもないモタニストぶりを示したものだ、という感想をもっている。(略)三章の、すわなち『眼の叫び』の頃から、漸次日常の底流にあつて一般には触れたくないもの、あるいは常民のくらしの背後にうごめく生と死の、アモルフで無限な往来への関心がきざしていた。この期には、自分の生活する土佐に上着して死んでいった先行詩人岡本弥太への関心も思い出される。(略)もっと単純な言語と鍛錬による主題の徹底した掘り下げによって、この詩人が挫折した地点から踏み出さねばならなかつたのである。こうした詩のアイデアをめぐつての想念が、にわかには詩に直結されていくことはむづかしい。この詩的想念は詩集『地の表情』でようやくその容姿を整えてきたようだ、とい

わねばならない。

片岡は日常の底流にあるものを求めるという方向へとその歩みを固めるようになる。高知の詩人・小松弘愛の片岡評もそのことを裏付けていよう。小松は「家族、肉親が詩の中に登場する時、そこには多くの場合、川の流れがある。そして、その川は遠く父祖の時代から重い暮しに耐えて、生き継いできた血族の血の流れの暗喩になっていることもしばしばである。」と指摘し、さらに詩の中に「たましい」という言葉が頻出することに注目、「川をさかのぼり、たましいの行方を追うという作業は、方言の問題に接点をもつことになった。」と述べる。詩「流れる家」にもあるように、「大雨になるとみんなあで／一間きりの小屋が流れて行かんよう／何本もロープを掛けた／しつかり椋の木に結えつけた／そうして 山すそへ走

った<sup>②</sup>」という、川にしがみつくように生きてきた父祖の歩みを片岡は詩に織り込んできた。そしてそれは、「山鬼」を収録した第四詩集『地の表情』（一九六六年）の頃から顕著である。

片岡が主宰していた詩集「開花期」に参加していた森田進は、「片岡文雄の詩の世界」（一九七八年）でこう述べている。

戦後詩が、コトバのためのコトバ遊びにまで落ち込んでいく危険にさらされている現況の中で、まさに全的に生きることを求めて苦闘している片岡文雄の世界は、安手なローカリズムや土俗性うんぬんの文化論を拒否している。そして現代日本人の魂の構造を、文学営為のもっとも普遍的なレベルにあって、切り裂いているのである。<sup>⑩</sup>

この言葉からは、片岡が高知にあって戦後詩の抱えていた課題を克服しようとし、その中で方言詩という試みをしていたことが窺える。そうした片岡の活動の代表作とも言える「山鬼」を次節以降に取り上げ、より深く見ていきたい。

## 二 「山鬼」と問題点

「山鬼／土佐国本川郷「寺川郷談」による」は一九六二年に書かれた<sup>⑪</sup>。池田勇人総理が所得倍増計画を打ち出し、農業に見切りをつけ工業政策に重点を置くようになって二年後である。管見の限り、この詩の初出は詩集『地の表情』（一九六六年）と考えられる。

以下に引用するのは、引用される際に底本として用いられることの多い『方言詩集 いごっそうの唄』のものである。

山鬼というものがおったといひますのう／それはほんのこと  
 ですらう／たれかのさぶしいすがたとおもひまするが／そんな  
 ら／山鬼とはたれのたましいですらうか／目ひとつ／足いっ  
 ぽん／それでなんでもことたらす／そんならなおさらのこと  
 山鬼とは／たれのたましいですらうか／山鬼はたれかわから  
 んのですが／山爺とも本川のひとはいうたのです／ちくしよ  
 にはなれませんきに／生きんといけませんきに／ひとのすがた  
 にかえらうとして／咳をしながら降りてくるのです／そんなら  
 いったい 山鬼は／たれのたましいですらうか／降りてはき  
 ても／仕事と飯はわけてはもらえませんまい／わかるものが本川  
 にはありますまい／山鬼の／杵でべたりおしつけたようなあ  
 しあとは／六尺おきに飛んでいくといひますのう／そんなこと  
 で 冬は／ぼおほおの火のまわりで／おとしおなごしが 急  
 に／だまり込んでしまふといひますのう／そんなら ありやあ  
 ／山鬼とはたれのたましいですらうか／忠五というひとのお  
 かやんが／行きちがいがまに／ひよいと見たといひますのう／  
 ふりむいたら／もう見えざつたともいひます／そんなら／忠五  
 のおかやんに消え入つたものは／たれのたましいですらうか／  
 ／山鬼は やっぱし／ちくしよじゃありませんのう／ひとにひゃ  
 く年もせんから／つけもの石かなんぞのように／ひとに取りつ  
 いて離れん／ありやあ もしやおまえさんの／ひきちぎれたた  
 ましいではありますまいか。<sup>⑫</sup>

詩は七連で構成され、一貫して土佐弁で語られる形になっており、中央の四連と最終連である七連以外は「山鬼」とはたれのたましいで

するるか」という問いかけが繰り返される。内容的には一・二連、三・四連、五・六連、七連の四つに分けられ、起承転結の構成になっている。

詩の副題にある「寺川郷談」とは、江戸時代中期、春木次郎八繁則が、本川郷（現いの町）に出張した際に書いた、当時の地理や風俗など山村の風習を知ることができる書である。そこには、山鬼についてこうある。

山鬼と云ものあり年七拾斗の老人の如し人に似たり、眼一ツ足一本糞の様なるものを着す、本川の山山ぢいと云、俗に云山ち、なるべし、へんげのものに非ずけだもの、類なるよし、されども常に人に見ゆる事なし、大雪の時足跡有、人往来の道を通る六七尺二一ツつ、足跡あり、丸きものなりさし渡し四寸斗たとへば杵にておしたる様に足跡あり、とびくして行よし、足跡は見けれ共其すかたを見ず、越裏門村の忠五右エ門と云者の母は行逢たるよし昼の事也、人の如くたごり来也、忠五右エ門母は行逢けれども見かへり見れは行方なしと云、あまりきもをつぶし家へ立帰り行へ行かずやめたり何事もなし、昨日の事をかたりしま、書付置也。

片岡の「山鬼」はこの記述をほぼ忠実に踏襲し、特に詩の起・転の部分に示しているが、山鬼が「けだもの、類」ではなく「ひとのすかたにかえろうとして／咳をしながら降りてくる」こと、詩で繰り返されている「たれかのたましい」という解釈は原典に見当たらないこと、「ひとに取りつ」という発想が加わっていることなど、片岡の創作の部分も見える。

ちなみに山鬼・山爺さんぢという怪異は、高知に限らず各地に散見される。県内ではヤマチチと呼ばれることが多く、山鬼という呼称は「寺川郷談」以外にはほぼ見られない。また一般的に「山鬼」は「さんき」と呼ばれるが、片岡はこの読み方について、

民俗学では「さんき」というふうに通読するようです。ただ私は、方言詩をやっておりますから、訓読みで大和ことばの系列で「やまおに」というふうに通読ことにしています。

とこだわりを述べている。

詩の舞台ともなっている本川は、いの町の北、吉野川の源流域にあり、愛媛県とも隣接している山深い地である。集落が谷間に孤立しているため、同じ本川であっても山で隔てられ、直接の行き来が難しい。かつては修験者の修行の地であり、明治維新後の一八七〇年に土佐藩のお留山であったところが開放され、木材の伐採が盛んになったが、一九六〇年頃から林業の衰退が見られるようになった。ちょうど「山鬼」の書かれた頃である。

山を降りざるを得ない山鬼の厳しい暮らしは、それよりも里にあるはずの本川でさえ「仕事と飯はわけてはもらえませうまい／わかるものが本川にはありますまい」という状況であることから推して知ることができるが、それは林業が盛んになる前の貧しい山村であった近世の頃とも、高度経済成長期の始まりに見捨てられつつあった山村のありようとも重なる。したがって、昔話を聞くように読み手が土佐弁の響きに身をゆだねていると、最終連において「山鬼」の話に読み手自身も取り込まれていくことになる。本川の山鬼の悲劇が、読み手自身の現在、あらゆる周縁の地の現在へとつながっている。

るのである。

なお本川の越裏門地区には地吉神社という神社があり、その祭神は「山千子」であるというが、これがどうして祀られるようになったかは伝えられていない。<sup>15</sup> いずれにしても「山千子」が本川の人にとっては身近な存在であつたらしいことは窺え、「ちくしようにはなれませんきに／生きんといけませんきに」という、山鬼の気持ちを代弁する語り手とも重なってくる。

さて、この詩は、片岡の四冊目の詩集『地の表情』（一九六六年）に掲載された後、小海永二編『日本戦後詩の展望』（一九七三年）、『方言詩集 臨月』（一九七七年）、詩画集『山鬼抄』（一九七七年）、『方言詩集 いごっそうの唄』（一九七九年）、『方言詩集 いごっそうの唄新装版』（一九八四年）、『土佐出版郷土文学シリーズ おらんくの唄』（一九八七年）、『現代詩文庫九三 片岡文雄詩集』（一九八八年）、川崎洋編『日本方言詩集』（一九九八年）等に再掲された。初出の『地の表情』とほとんど言葉の定まった『方言詩集 いごっそうの唄』とを比較すると、異同は以下のとおりである（『地の表情』↓『ちくしようの唄』）。

- 一連一行目「おつたといひます」↓「おつたといひますのう」  
 二連二行目「あしいつぼん」↓「足いっぼん」、四行目「そんならなおさらのこと」↓「そんならなおさらのこと 山鬼は」  
 三連四行目「ちくしよう」↓「ちくしよう」、七行目「そんならいつたい山鬼は」↓「そんならいつたい 山鬼は」  
 四連二行目「仕事とめしは」↓「仕事と飯は」  
 五連三行目「ろくしやくおきに」↓「六尺おきに」、同一「いい

ます」↓「いいますのう」、四行目「そんなことで冬は」↓「そんなことで 冬は」、六行目「きゆうに」↓「急に」、七行目「いいます」↓「いいますのう」、八行目「そんならありやあ」↓「そんなら ありやあ」、九行目「たれのたましいですらうか」↓「山鬼とはたれのたましいですらうか」

六連二行目「いきちがいさまに」↓「行きちがいさまに」、三行目「ひよいと」↓「ひよいと」、五行目「みえぎつた」↓「見えぎつた」

七連一行目「山鬼はやつばし」↓「山鬼は やつばし」、二行目「ちくしようちや」↓「ちくしようちや」、三行目「にひやくねん」↓「にひやく年」、五行目「とりついで」↓「取りついで」、六行目「ありやあもしや おまえさんの」↓「ありやあ もしや おまえさんの」

旧仮名遣いから新仮名遣いに、ひらがなであったところも漢字になり、土佐弁に詳しくない人間にもわかりやすい表記に変化していることが指摘できる。なお、『臨月』再録時はすでにこのような傾向が見られる。

同時代評はほとんど見当たらない。管見の限りでは、平田文也『詩書批判への疑問から』（一九六七年）が、「山鬼」が掲載された詩集『地の表情』全体の評として、このように述べている。

個人詩集としては、片岡文雄氏の『地の表情』（思潮社）がネガチブな心象でぼくをはげしくとらえた。すみきつた水のようなことはをたゆたわせて、みずからの生のおとみにひそみ、じつと息をこら<sup>マ</sup>らしているのだ。そうして死をみつめる詩人の



とおまなざしはつめたい炎に映える。(略)すでに第四冊の詩集をかさねた片岡氏は、やはり詩人として当然な、そして素朴な問いをくりかえす、「わたしは死を超えられるか、わたしは名づけるものとなり得たか」と。<sup>16)</sup>

詩への評価が見られるのは七〇年代に入ってからで、小海永二は、『日本戦後詩の展望』(一九七三年)の第七章「土着の詩」で「山鬼」を取り上げ、「この詩人は特に自然の中の生命的なものに共感を寄せており、そこから土着信仰としてのアミニズムやミステックな地霊崇拜へと関心の触手をのばして行っているように見える」と述べる。<sup>17)</sup>

また、小松弘愛は、「仁淀の水」(一九八八年)で、この詩を「日本の方言詩の中でも屈指のできればではないか」と評し、その理由として「土佐方言という特殊性におおわれず、それを開かれたものにしてゆこうという配慮がよく働いている」ことを挙げている。しかし一方で、こうも指摘する。

憑依の対象を求めて浮遊するたましいへの鎮魂の詩——「山鬼」はそういう相を見せているのだが、その魂しずめの言葉は方言をおいてほかにない。共通語では逆に荒ぶるたましいとあって救われない。山鬼の悲劇は共通語によってもたらされたものだから。むろん、共通語に「近代」という言葉を重ねて、<sup>18)</sup>ある。

ここでは鎮魂の詩として捉えられ、共通語では癒されないと指摘されている。この評はしかし、ある疑問を生じさせる。方言詩を書くということと、「開かれた」詩を書くこととする試みは、そもそも

矛盾しているということである。この矛盾は非常に興味深い。

次節以降、片岡自身による「山鬼」評価と当時の詩壇の状況を確認したい。

### 三 六〇年代における地方性の問題

川崎洋は、片岡の「山鬼」も掲載された方言詩のアンソロジー「日本方言詩集」(一九九八年)で、このように述べている。

現在手元に九十三冊の方言詩集がある。全編方言詩ではなく数編が収録されている分を含めての数で、わたしの目が届かなかった方言詩集もあるだろうと思う。九十三冊の刊行時期を調べてみると、戦前刊行〓二冊、六〇年代〓二冊、七〇年代〓十一冊、八〇年代〓三十六冊、九〇年代(八年間)〓四十二冊で、八〇年代に入ると急カーブで刊行数が伸びていることがわかる。(略)自然環境が破壊され、方言詩の精神土壌も荒地と化しつつある。方言詩集の刊行の伸びはそうした時代相にノウを表明する存念と深くかわり合っている気がしてならない。そこには祖先の声が息づいているはずだ。方言を懐かしむというレベルを越えているの言うまでもない。<sup>19)</sup>

「山鬼」が何度も詩集やアンソロジーに再掲されているのは、いくつかの詩集のタイトルに「方言詩集」と明示していることから、明確にこのようなブームが関わっていると考えられる。だが先述したように、「山鬼」の詩自体は一九六二年、すなわち六〇年代初頭に書かれており、こうした流れのなかでも比較的早い時期であった。

方言詩ブームが直接の契機でないとすれば、片岡が方言詩「山鬼」を書いたきっかけはどこにあったのか。

この詩が書かれた一九六二年前後の状況を見ると、「詩学」一九六二年六月号には、「詩と生命力の接点」として、戦後詩の中で「生命力」がどう解放されたかを展望した原崎孝の論が掲載されている。原崎は、山本太郎の詩を評してこう述べる。

原始の混沌の中に生きていた人間が見ていたものは、「混沌」などという観念ではなく、混沌たる事象そのものからジカに感じる不安であり、おそれであった。われわれは思弁的に観念化してしまつた「神」や「暗黒」などというものも、ジカに触れ得るものとして在つたのである。(略)この反文明への希求が、文明的世界の欠落部を照射し、思弁的観念的要素のつよい戦後詩のひとつの傾向に対して、強力なアンチテーゼとなつたのである。<sup>(21)</sup>

近代詩を回復させるものとして、観念ではなく、混沌たる事象そのものが注目されていたことがわかる。

しかし興味深いのは、この頃こうした生命力の問題と地方性の問題が関連付けられて取り上げられるようになったことである。「現代詩手帖」で、入沢康夫が一年の詩論の動向を踏まえて書いた「重要な一時期」(一九六三年)によれば、「昨年原崎孝が『年鑑現代詩集』で触れ、更に今年に入って『詩学』一月号の編集後記で木原孝一が『私はひとつの方向として地方性の再発見ということを考えている。都会性の文学はついに消耗文学にならざるを得ないのではないか、云々』と書いたことが、地方発行の多くの同人誌の注目を集

めることとなつた。」とある。ここで挙げられたものうち、最も早い時期に地方性の問題を訴えた『年鑑現代詩集』(一九六二年)の原崎孝「詩と地方性の問題」を見ると、こう書かれている。

そしてなお、現代詩の停滞状況は続いている。全ての声はでんでんばらばら、あるいは、附和随行の関の声。(略)わたしがここに、詩における地方性の問題を取り上げようとする意図は、このひとつの具体的な問題を通して、「個」と「普遍」との対応の論理を一つの角度からもう一度見なおしてみようとする試みに他ならぬ。<sup>(22)</sup>

この、個から普遍へという意識は、先行する山本健吉の論「文学と民俗学」(一九五六年)にも見られる。

エリオットが「詩(文学)は個性からの離脱である」と言ったとき、考えられているものは、ルソーにおいて意識されたような、ロマンチックな個性である。自分を他と区別しようという意識が、芸術家に表現すべき新奇な感情を、限りもなく追及させ、新奇への追及は、また限らないデフォルメへの追求となる。近代の芸術は、このような追求のための追求の無間地獄に陥っていると言っても、過言ではない。エリオットの考えの根底には、近代芸術が陥っている地獄状態からの脱却、言いかえれば個性の荒廃状態からの救済の方途の追求がある。(略)文学と民俗学が結びつくのは、それが何等かの意味で個の表現を超えたところで成立していることと見ることの出来る場合にかぎるものである。<sup>(23)</sup>

個から普遍へ、の追求が早い時期から行われているのみならず、



それが民俗学と結びつく点は、原崎の地方性の論を先取りしているように興味深い。さて、原崎は現代詩の抱える課題から地方性の問題が浮かび上がってきたと述べ、さらに「地方性の問題は、地方の問題から、日本文化の一側面の問題へと転化して、普遍性を獲得することに「なるだろう」と結論している。だが、「詩学」七月号の「詩壇なんでも云つてやるう 地方と中央と」（一九六二年）という項目で示される各地域の詩人たちの意見にはこうある。

ほかの芸術の世界と同様、ここでも中央と地方という命題が、東京と非東京という形で露呈されており、歴史は浅いながら中央集権の根は深く、地方性、風土性などという概念が、大衆とは無縁なところで、本質ともずれた位置で釘づけされている。  
（高松文樹、福岡）

そして実質的に地方の文化に何とか小さいながら価値観を見いだそうとする詩人が、地方性という言葉は使いたくないのだといつて頑張っている気持が地方性を評価しようとする論者にどれだけ理解されているだろうか。（荏原肆夫「ある環境から」、<sup>(26)</sup>広島）

一般に、地方の詩人たちは目の前に存在する地方の現実注目しており、中央集権の状況、そして中央から規定される「地方」への違和感をより強く持つていたことがわかる。

前掲した入沢の「重要な一時期」では、地方性論議について、その一は地方在住詩人が都会詩人に比して不利であるということと——つまりは作品発表や詩活動の場の狭さを嘆ずるということ、第二は個々の地方独特の現実といかに対決し、いかに作品

化するかという次元、第三は地方に残っている民衆的エネルギーの追求、つまり民俗的伝統や感性の発掘と活用を論ずる次元である。<sup>(26)</sup>

と、三つの側面があることを指摘している。地方詩人の意見を見ると、原崎の提示する「個」と「普遍」の論理というよりも、中央に対する地方のありようという見方が強いことが「中央集権」という語から窺え、「個」と「普遍」、民衆的エネルギーについてはそれほど地方で論じられていない現実が見える。

しかし翌年、「詩学」一九六三年六月号に「現代詩・地方性」という特集が組まれ、永井浩、黒田達也、そして片岡の論「地方性論議をめぐる感想」が掲載された。片岡の論は原崎の「詩と地方性の問題」を踏まえた内容となっている。片岡は、六〇年代に盛んに言われるようになった「詩の生命の回復」に対し、詩の地方性の問題が「ある肉付けと重さを与えるようにあらわれた」と述べている。そして原崎の論からさらに踏み込み、より具体的な例として高知の各地に伝わる子守唄の根源的なエネルギー追求、方言による詩の効用として中央集権的な生活機構から外に出ることを挙げた上で、片岡と同じく「貌」に参加していた笹原常与の言葉「私は、歎き、悲しみ、悔恨、不幸、涙といったような、戦後の日本文学がとかく軽蔑しがちであったものを通して、『共有の世界』をさぐりあて、そこへ降りてゆきたい」<sup>(27)</sup>を引用し、共感の意を示している。

片岡にとつて、地方性とは詩の生命力の問題であり、失われた「共有の世界」を取り戻すためのものであった。人間の根源的な生命力を子守唄などから学ぶこと、方言で詩を書くことで中央集権的な自

身の思考形態を問い直し、標準語の詩もまた再考していくこと、そして詩の生命力を獲得し同世代と共有して行くこと、が片岡の重要な命題として浮かび上がっているのである。「山鬼」が方言を使うのみならず、民俗的な材料に取材して書かれたのは、先に引用した山本論を踏まえているかもしれない。いずれにせよ、きわめて同時代的な問題意識の下で「山鬼」が書かれたことは間違いない。

それでいて、地方性を生かした質のいい作品が出てこないもどかしさを、多くの詩人が抱えていた。一九五九―一九六〇年頃から、地方の詩壇が活性化し、地域ごとのアンソロジーが出されるようになる一方、そこに書かれる詩はほとんど中央志向の規格品であるという状況であった。一九六三年の詩壇の話題をまとめた同一・二月号の平井照敏「詩壇分析1963」は、地方の詩人たちが「中央」という言葉によって東京を象徴することに「異様な感じ」を受け、さらにそうした「中央」への不満を口にする地方の詩人たちについて「それでいて、月評などをしている際、ひどく奇妙な気がするの、毎月送られてくる詩集や雑誌の作品が、ほぼ一様に現代詩の規格品だということなのだ。それでいて、これはという作品も発言もすくない。」と皮肉り、「それは詩への執着力の不足、自分と詩とのからみあう場での格斗の不足ということだ」と痛烈な言葉を投げかけている。先に引用した「詩壇なんでも言つてやろう」にも見られたような、中央と地方という二項対立の中で、地方詩壇の抱える物理的困難や不満を地方性の問題と反射的に捉えてしまう現状が、地方性論議や実作の深まりを阻んでいたと言えよう。

片岡もまた、地方性ときちんと向き合った詩が書かれない状況に

不満を抱いていた。より片岡が率直に自身の意見を発表し得たと思われる同人誌「漕役囚」一九六三年冬号では、地方性の問題をこのように述べている。

私たちの地方では、いまだにナチュララな精神がもつ調和を、詩の美とし、感動として享受している例が多く見られる。それは詩を読む側の、あのもっとも困難な詩の歴史への無理解と、その放棄からくる残酷な姿勢だけではなく、詩の書き手の側にもしのでのがないものでもある。(略)

詩の精神の変革的近代化は、わが国の近代国像の性急な模索と呼応していた。近代の詩の出発には、時代・外界の重さを一一篇の詩が内包し、同時に創造的な未来・魂の自由をも手さぐるという二重の像を統括させていこうとする義務をになつていた。それを満たすことによって詩の書き手自らが再生することができた。

しかし記憶したいのは、私たちの地方ばかりではなく、わが国の地方がほとんど、絶対的といつていいわが国の近代国家像確立の埒外におかれていた。ずれ落ちていた。その歪みが、私たちの詩の近代化の模索の理解の不可能へ結びついている。私は推測する。

六十年代に入り、詩の活力回復に、詩における地方性・風土・土着の精神への再検討が活発におこなわれはじめた。その趨勢についても、とにかくナチュラリズムの勝利と解される悲劇がどうしてもあらわれてくる。私たちは、そういう理解の回路の不幸を追放することを、詩の歴史の直接的な理解という作業に

加えなければならぬとおもう。<sup>29)</sup>

地方の詩の読み手、書き手が、日本の近代国家における詩の変革に飲まれ、実は歪みそのものも自覚していないのではないかと、片岡のもどかしい思いも伝わってくる。先述したように、片岡は近代詩の成立にそもそも欠けていたものを回復させるためのものとして地方性を位置づけており、したがって地方性は単純な自然賛美とは全く異なるものであると考えていたことが窺える。それは「山鬼」において、昔語りの怪異を面白がることではなく、山に置き去りにされた自らの「ひきちぎれたたましい」を探るという切実な試みであったとも言えるだろう。父祖の歩みを辿りながらその「たましい」を取り戻すことが挫折した近代詩を回復させることであったのである。

前節で指摘した小松の言葉に見られる、万人に開かれた詩でありながら、たましいの鎮魂歌でもあるという「山鬼」の評は、こうした片岡の考えに答えを求めることができよう。近代詩を硬直化させた中央志向の考えから一度解き放たれるために民話や方言が必要であった。近代化の波の中で取り残されつつある山鬼の気持ちを汲み取ることができるのは、生活に根ざした方言という言葉なのである。それは高知という一地方に限らず、「中央」の詩人も含めた当時の詩人たちが共通して抱えている、近代詩の膠着を破り詩の生命を取り戻すという課題でもあった。だからこそ誰でも共有できる言葉が求められ、ある特定の地方でのみ通用する言葉は排除される必要があったのである。地方性の問題が活発に論じられる少し前であり、過疎化などの問題が顕在化する前であったにもかかわらず、「山

鬼」の詩が書かれたのはそうした背景があったためであろう。一方、高知に限らず地方の詩人たちが、共に詩の地方性について考えているとは言いにくい状況が見え、片岡の詩的活動の孤独を偲ばせるのである。

#### 四 「土佐の方言詩」に見る七〇年代の活動

この「山鬼」は、のちに多くの詩人によって評価された。詩を再録した詩集『いごそうの唄』の「おぼえがき」（一九七九年）では、「山鬼」が方言詩として全国的に注目された経緯として、川崎洋が「方言の息づかい」出版のために方言を採集している際、高知の片岡を訪ね、土佐弁のニュアンスを伝えるために片岡が自作の詩を朗読し、川崎さんがテープに取め東京で披露したことを挙げている。

川崎さんのさつそくのおたよりで、とくに本書にもおさめた「山鬼」が好評であった旨が伝えられました。この会に出席された詩人の茨木のり子さんからも、つぎのようなおたよりが出て、私はずいぶん励まされたことでした。

既におききでしょうが、「ことばの勉強会」でも（山鬼）が多大の感銘を皆々に与えました。あとで木下さん（注、木下順二）、山本さん（注、ぶどうの会主宰・山本安英）、川崎さんたちと飲んだときも、ゼツサンされていました。声の良さにも一驚いたしました。が、神保町の一角を一瞬ふしぎな風が通り抜けたような気がいたしました。

（略）しかしながら肝心なことは、テープに入れたもののう

ちの、それが「山鬼」一篇のことであり、なお注意を要するのはその方言の朗読そのことか、土佐方言の文学のことばとしての可能性のことなのか、あるいはまたそれらをも含めた詩が全般にもフリアリテイ、すなわち生命感であり説得性のことなのか、それははっきりと私に伝わっていないわけです。詩の作者としての私は、むしろ右に私がいう後半に評価があったならばと願ったものでしたが、時が経過してみれば、その前半をも含んだかたちであればなおよいが、と欲張った想いがつります。<sup>(30)</sup>

『方言の息づかい』は一九七八年の刊行である。「山鬼」が後に『いごっそうの唄』などに繰り返り返し収録され、そのたび品切れとなるほど有名なものになった背景が窺えて興味深いが、それだけでなく、片岡自身の詩の受取り方が少しずつ変化している点も指摘できる。当初は詩の生命感や説得性を重視していたのが、土佐弁の朗読や方言が文学の言葉として成立するか否かにも興味が移っているのである。どちらとも六〇年代にはすでに見られる考えではあるが、元々は詩の生命力の回復という課題から地方性という考えを打ち出したこと、方言については、思考のあり方を再考するという提言にとどまっていたことを考えると、方言という言葉についての考えがより明確に示されていると言える。

では、七〇年代の片岡はどのような試みを行っていたか。この詩集が出る少し前の一九七六年、片岡は「高知新聞」に「土佐の方言詩」を約二カ月にわたって連載しているが、この論を中心に片岡の興味を辿ってみたい。

冒頭部分で、方言詩の意義について片岡はこう述べている。

ことばは人間の生活の特色を決定づけるから、この一世紀に日本人は中央志向の感覚を一人ひとりの生活感覚として抜きさしならないものとしていった。中央集権の社会機構の下では、地方的というのは妙に気になる。恥ずかしい。(略)

しかし、このことばの近代化は妙に変だ。くらしの感覚が、ごっそり抜け落ちていく。

方言詩は、実はこの近代化を疑うことにはじまるのである。<sup>(31)</sup>この連載は土佐に限らず、さまざまな地方の方言詩を取り上げているのだが、六〇年代における地方性の問題が引き継がれ、さらに「ことばの近代化」による「くらしの感覚」の欠落という問題意識が明確に示されている。六〇年代ではやや抽象的に捉えられていた地方性が、おそらくは近代化による弊害が表面化したという時代状況を背景として、より明確に言葉の問題として取り上げられるようになっていくことがわかる。

連載では、「山鬼」についても触れ、こう述べている。

もっとも前回に引用した『山鬼』の場合、へたれかのさぶしすがた、いいかえれば時代から見捨てられた辺地の人の心をすくい取るということ、今日の過疎化現象の進行を予覚するかたちで、民話的材料の現在化をはかろうとしたわけである。

しかし、この詩の途中で、私はどうも民話的な材料もたれを自分がやっていることに気づいた。酒と一緒で、民話伝説の類は人を居心地良く酔わせる。今日をどうするかというより、昔はよかったという感覚にずれ込ませてしまおう。(略) この終連でようやく、私は、土佐の人間ひとりひとりが、何かくらし

の心はぼつかり穴があいていないかどうか、ふりかえらせるブレーキをかけたつもりでいる。(土佐の方言詩)<sup>32)</sup>

ここで興味深いのは、民話的なモチーフを使って詩を書く際にいかに現代性を持たせるかといった点について言及し、「くらしの心」にぼつかり空いた穴、おそらくは連載の冒頭に示されていた「くらしの感覚」の欠落に対する警告が「山鬼」最終連に込められているとしている点である。民話的材料へのもたれ、これは六〇年代にも指摘していた「ナチュラリズムの勝利と解される悲劇」であろうが、これについての反省も書かれており、民俗的材料を使っても、詩を昔話とするのではなく、現在の問題として読み手に示すことが述べられている。これは、川崎洋によるアンソロジー『日本方言詩集』(一九九八年)に掲載された時と同様で、

自作「山鬼」の場合、基本的には土佐ことばで書いている。しかし、土佐の高知という特定の地域語をめぐる注釈は不要といえる。(略)<sup>33)</sup>

伝承の妖怪に題材を求めているが、そこに高度経済政策、列島改造論の進行で集落を解体され、下山を余儀なくされて、都市の新たな住民となった山びとのかなしみを重ねた。そうしてわたしの心のいたみも宿した。<sup>33)</sup>

とある。

さて、このように継続して見られる、「ひらかれた」方言へのこだわりは、五〇〜六〇年代に掲げられていた理想をより具体的な形で示したと言える。実際、「個人的なものから普遍性へ」という言葉は片岡の口癖であったという。高知の同人詩誌「兆」の代表で

ある林嗣夫は、片岡のこの口癖について、こう述べる。

高知という、所得の少ない「うずくまる人々の土地」に、詩を通して生きぬくということ。そのことを通して、日本列島の各地に沈み込む、同じように切り捨てられる土地の人々の思いと、通じる道が開かれるのではないか。それが片岡さんにおける「普遍性」ということではなかったらうか。<sup>34)</sup>

先述したように、「山鬼」は全国の各地で伝えられている怪異であり、片岡自身もその地域のみで通用する言葉を排除し、誰でも理解できる言葉で書いたと述べている。また「口癖であった」という林氏の言葉からは、「共有の世界」を取り戻すという命題が片岡のなかに継続して存在していたことがわかる。七〇年代以降の詩集に再録された「山鬼」の言葉が、より意味を汲み取りやすいものに変化していることも合致する。

さらに、詩の言葉としての方言の可能性については、片岡とも親交のあった高知の詩人・西岡寿美子の言葉を引用して紹介する。

大げさやけんど、方言というてもそこに美ということをあたしはかたちづくりたい、とおもうちゅう。ただ単に泥くさいいではなく、方言による美ということを願うわけ<sup>35)</sup>

『いこっそうの唄』で、「土佐方言の文学のことばとしての可能性」に片岡は言及していたが、周辺の詩人もまた方言の可能性に注目し、自身の詩の活動のなかで磨いていたことがわかる。こうした環境は、片岡にも刺激になっていったであろう。方言と共通語の詩について、片岡はこう述べている。

方言が生活の言語、暮らしのことばであるということは、取り

も直さず、それが書きことばではなく、本来話ことばであるということである。共通語もしくはそれに近いことばでしか書けない詩人は、その人工性を逃がれることができない。いきおい、言語のもつ仮構性、架空性を高度に究めていく方向がつよくなる。それもいい。そこにも表現の個性はある。しかし、彼らは生活に根ざしたことばの個性を、自らにないものとして、ノドのかわきをうるおすかのように欲している。<sup>36)</sup>

こうした言葉を踏まえると、朗読に対する興味も、方言の可能性への興味の広がり、端を発すると考えられる。「山鬼」もまた、語りという形式で書かれていた言葉である。片岡は晩年に至るまで自作を朗読しているが、こうした試みは、「話ことば」である方言の探究だったのではないだろうか。

方言というのは話しことばでございませう。本質的に話しことばです。書きことばとして日本人の歴史の中で鍛え上げられておるといふふうな大きい道はないわけでありませう。それで、書きことばではない、たとえこれが活性化されておつても、方言は日常の生活のことばでありませう、これを言語学的に申しませうと、話しことば、特に方言というのは無文字であります。<sup>37)</sup>

残された片岡の朗読の録音を聞くと、訥々とした調子で語られる「山鬼」は、まるですすり泣きのような独特の響きを持つ。訴えかけるようなアクセントや間の取り方、リズムなどによって、土佐弁に詳しくなくとも意味は汲み取れる。それは前掲した西岡の「方言の美」という言葉から連想されるイメージとは真逆で、むしろ泥臭い印象さえある。だが、二節で示したような、「地の表情」から『い

ごっそうの唄』への言葉の変化のうち、間の取り方や「いいます」から「いいますのう」への変化などは、右記のリズムやアクセントがより際立つものである。片岡は朗読という手段によって詩を鍛えこみ、伝えていくという方法を、一方で標準語の詩を書くという営為とともにやってきたのではないか。またこれは、方言の美という未だ定まった基準さえないものを創造することでもあったのではないか。

しかし気になるのは、片岡の最後の詩集『流れる家』に収録された詩の中で、高知の雑誌に発表されたものは一つもないということである。片岡は、『臨月』『いごっそうの唄』『はちきんの唄』『おらんくの唄』などの方言詩集を残しているが、最初の方言詩集『臨月』に対して、『詩学』の「詩書批判」(一九七七年)では寺門仁によってこのように評されている。

氏は土着の現場に生活している故に、方言詩についてある醒めが働いている。現場にいる故に方言帯から飛び出さざるを得ない詩人の宿命を抱えているし、方言の限界も愛着も共に抱えている。片岡は方言と共通語の双方に期待と批評の眼差しを向けている。方言の世界に降りて、その根の太さを再認識するとき、実は氏はある種の不安や寂しさも抱えるのだ。<sup>38)</sup>

確かに、方言詩のブームのなかにあって、片岡の姿勢は、ある種の距離感、「醒め」を感じさせるものであった。方言詩ブームのなかには、先の川崎洋の引用にあるように、失われつつある方言とその土壌を再評価するという暗黙の了解があるように思われる。しかし今まで見てきたように、片岡は方言を無批判に賛美する立場では



なく、さらに共通語の再評価も含めて考えており、方言詩についても「むしろ書きづらい。常民の生活感覚と目されるものと私一個の間に、一本の方言という丸太をかるうじて架け渡すことが可能と思われたときだけである。」と述べている。冒頭で示した、ふるさとの日々を「一種異郷にある想いで日々耐え」という言葉は、高知という地方にあって、方言にも標準語にも一定の距離を保ちながら挫折した近代詩の回復を探るといふ覚悟であったともいえよう。

## 五 まとめにかえて

本論は、戦争という現実の前に挫折した近代詩の、その歴史の中に置き去りにされた「地方性」を追及し、詩のあるべき姿を取り戻そうとした片岡文雄の方言詩における試みを中心に見た。「山鬼」は、近代化による歪みの問題が現象として現れてくる前に、あたかも予見のように書かれた詩である。それは六〇年代に、近代詩の抱える問題を「地方性」という面から解決していこうと決めた片岡の、愚直とも言える活動の始まりのものであると同時に、七〇年代の方言詩ブームのなかに取り込まれながら発展し、語り言葉である方言の詩の可能性を晩年に至るまで追求した、片岡の活動を象徴するような作品であったと言えよう。

しかし一定の評価はされていたものの、片岡の詩活動は、孤独な営為だったとも言える。それは何故なのか。

見てきたように、多くの詩人にとつては、地方の現実が大きく迫り、地方も中央も含めた詩の発展という視野を持ちにくいこともあ

るだろう。だが、それでは片岡自身も挙げている、同じ問題を共有していた詩人がいたことを説明できない。

さらにもう一つの可能性として、方言そのものの変質があり、片岡の試みがそうした矛盾の中で行われていたことが挙げられるのではないだろうか。論の中で触れたように、方言詩「山鬼」には鎮魂の詩としての側面と、開かれた詩という側面と、矛盾した二つの要素が含まれている。本来方言は、限定された地域の中で、生活に必要な言葉として使われており、片岡もまた、言葉の近代化について「くらしの感覚」の欠落を指摘していた。しかしこの「くらしの感覚」の欠落は、戦後さらに加速したのではないだろうか。

片岡と共に活動してきた嶋岡は一九六三年前後の「詩学」を振り返る中で、こう述べている。

すでに二十年をへて振り返ると、わたしたちの世代には、何らかの意味で昭和初年代の（四季）派に通じる優雅さが、やさしい抒情が、まだ共通して残っていたように思える。わたしたちの次の世代、いわば純粋戦後派こそ、そのような美的体質の変革者であった。谷川俊太郎ものにできなかった（新しさ）を、兇暴なかれらはわがものにした。いい意味でも悪い意味でも、（第三の新人たち）（略）のあとにこそソトバの現代的革新は実現された<sup>10</sup>。

言葉の変革の要因はさまざまに挙げることができよう。そして変革のあとには、言葉から汲み取られる生命力、すなわち近代詩に失われた「共有の世界」を取り戻すはずの力もまた変質するのではない。より正確に言えば、方言を単なる地方のアイデンティティと

して受け取ってしまう読み手に、生活の中で培われた、本来汲み取れるはずの生命力を感じる事ができるのかということである。

この問題はしかし、片岡個人の問題ではなく、地方で活躍する他の詩人や作家も含めて考えていく必要がある。このことは今後の課題とし、今は筆を擱く。

## 注

(1) 以下、詩人については岡林清水『高知県文学史』高知市立市民図書館 一九六四(昭和三九)年、岡林清水・木戸昭平・片岡文雄監修『郷土文学 土佐の近代文学者たち』土佐出版社 一九八七(昭和六二)年、『郷土文学 続土佐の近代文学者たち』土佐出版社 一九八八(昭和六三)年等を参考にした。

(2) 「東京新聞」一九八五(昭和六〇)年六月一九日、引用は『現代詩文庫九三 片岡文雄詩集』思潮社 一九八八(昭和六三)年六月

(3) 片岡の略歴は嶋岡辰「カヴァレリア詩人の窓」(『現代詩文庫九三 片岡文雄詩集』思潮社 一九八八(昭和六三)年六月)、「片岡文雄自筆略歴」(高知県立文学館蔵)に拠る。

(4) 大野純「僕たちは何処から来たか・何処にいるか・何処へ行くか」、「猿」二二集 一九五六(昭和三一)年、引用は『現代詩鑑賞講座 第二二巻 明治・大正・昭和詩史』角川書店 一九六九(昭和四四)年一〇月

(5) 粟津則雄『昭和詩史二』、『現代詩鑑賞講座 第二二巻 明治・大正・昭和詩史』角川書店 一九六九(昭和四四)年一〇月

(6) 片岡文雄「戦後詩という呪縛」、「現代詩手帖」第三六巻二号

一九九三(平成五)年二月

(7) 片岡文雄『初期詩篇 薄明』混沌社 一九七一(昭和四六)年七月

(8) 小松弘愛「仁淀の水」、『現代詩文庫九三 片岡文雄詩集』思潮社 一九八八(昭和六三)年六月

(9) 片岡文雄『流れる家』思潮社 一九九七(平成九)年一月

(10) 森田進「片岡文雄の詩の世界」、『日本文芸の研究』——實方博士古稀記念論集——桜楓社 一九七八(昭和五三)年五月

(11) 片岡文雄「土佐の方言詩」一〇、「高知新聞」一九七六(昭和五二)年七月七日

(12) 片岡文雄『方言詩集 いこっそあの唄』RKC高知放送 一九七九(昭和五四)年

(13) 春木次郎八繁則『寺川郷談 全』和田隆明発行、一九八九(平成元)年

(14) 片岡文雄「書きことばと話しことばの間で」、「詩朗読と講演の夕べ」実行委員会編『片岡文雄の世界——方言詩をめぐって』本多企画 一九九三(平成五)年八月

(15) 本川村史統刊編集委員会編『本川村史 第二巻——社寺・信仰編』本川村 一九八九(平成元)年一〇月

(16) 平田文也「詩書批判への疑問から」、「詩学」第二三巻第一号、一九六七(昭和四二)年一月

(17) 小海永二『日本戦後詩の展望』研究社 一九七三(昭和四八)年一〇月

(18) 小松弘愛「現代詩——「見る」ということについて——」、「高大

- 国語教育』第三三号 一九八五(昭和六〇)年二月
- (19) 小松弘愛「仁淀の水」、『現代詩文庫九三 片岡文雄詩集』思潮社 一九八八(昭和六三)年六月
- (20) 川崎洋編『日本方言詩集』思潮社 一九九八(平成一〇)年七月
- (21) 原崎孝「詩と生命力の接点」、「詩学」第一七卷第五号 一九六二(昭和三七)年六月
- (22) 入沢康夫「重要な一時期」、「現代詩手帖」第六卷第一二号 一九六三(昭和三八)年二月
- (23) 原崎孝「詩と地方性の問題」、『年鑑現代詩集(一九六二)』思潮社 一九六二(昭和三七)年六月
- (24) 山本健吉「文学と民俗学」、『現代詩論大系三卷』思潮社 一九七一(昭和四六)年一〇月、初出は「文学」一九五六(昭和三一)年一月
- (25) 「詩壇なんでも云つてやろう 地方と中央と」、「詩学」第一七卷第六号、一九六二(昭和三七)年七月
- (26) 入沢康夫「重要な一時期」、「現代詩手帖」第六卷第一二号 一九六三(昭和三八)年二月
- (27) 片岡文雄「地方性論議をめぐる感想」、「詩学」一九六三(昭和三八)年六月
- (28) 平井照敏「詩壇分析(一九六三)」、「詩学」第一八卷第一一号 一九六三(昭和三八)年二月
- (29) 片岡文雄「編集後記」、「漕役囚」一九六三(昭和三八)年冬号
- (30) 片岡文雄「おぼえがき」、『土佐方言詩集 いごっそうの唄』一九七九(昭和五四)年二月 RKC高知放送
- (31) 片岡文雄「土佐の方言詩」一、「高知新聞」一九七六(昭和五一)年六月二八日
- (32) 片岡文雄「土佐の方言詩」一一、「高知新聞」一九七六(昭和五一)年七月八日
- (33) 川崎洋「あとがきに代えて」、川崎洋編『日本方言詩集』思潮社 一九九八(平成一〇)年七月
- (34) 林嗣夫「普遍性」ということ——追悼、片岡文雄さん、『わたしたちの詩人片岡文雄 記念追悼集 カシオペア特別号』飛鳥出版室 二〇一四(平成二六)年二月
- (35) 片岡文雄「土佐の方言詩」一四、「高知新聞」一九七六(昭和五一)年七月一日
- (36) 片岡文雄「土佐の方言詩」三、「高知新聞」一九七六(昭和五一)年六月三〇日
- (37) 片岡文雄「書きことばと話しことばの間で」、「詩朗読と講演の夕べ」実行委員会編『片岡文雄の世界——方言詩をめぐる』本多企画 一九九三(平成五)年八月
- (38) 寺門仁「詩書批判」、「詩学」第三二卷第一一号 一九七七(昭和五二)年一〇月
- (39) 片岡文雄「臨月」混沌社 一九七七(昭和五二)年八月
- (40) 嶋岡農「詩学」二百号のころ、「詩学」第三八卷第一一号 一九八三(昭和五八)年一〇月